

《鮭図》に迫る－さかなをえがく ワークショップの成果と課題

野村 宏毅

1 はじめに

当館のワークショップは、創作活動を中心とした「びじゅつ☆体験隊」と鑑賞活動を中心とした「発見！びじゅつかん」の二つの柱で構成されている。これらのワークショップは、教育普及活動の一角を担い、以下のような目的をもって活動を進めている。

○教育普及の活動を「学びのプログラム」として見直し、気軽に美術館へ足を運んでもらえるようにする。

○講座は内容によって対象の焦点を絞ったり、多くの世代に対応した講座を用意したり、柔軟な体制・準備で活動を進める。

これらの講座の中で自分が担当したワークショップ「高橋由一の《鮭図》に迫る」の成果と課題について考察し、次年度事業の指針としたい。

2 本ワークショップの意義

「高橋由一の《鮭図》に迫る」は、「企画展：油絵事始めリアリズムを求めて（4月11日～5月31日）」に合わせて計画したワークショップである。「《鮭図》1879-80年 笠間日動美術館蔵」は、ポスターやチラシの画像として使用され、この企画展の核となる作品であり、同作者の「《鮭》1877年頃 東京藝術大学大学美術館蔵」は重要文化財にも指定されており、それぞれ知名度も高い。

この価値ある作品に迫る活動として、高橋由一をはじめとした当時の作家たちや洋画創生期という明治という時代へ思いをさせ、身近なモチーフで表現活動の面白さを体験することが出来るように、さらにそれらの経験がより充実した企画展の鑑賞に資するように、本ワークショップを計画立案した。

3 ワークショップの実際

事前の準備としては、参加者にモチーフの準備だけをお願いした。さかなを描くということなので鯖、鰯、イカの干物をモチーフに準備してきた人が多かった。

美術館では用紙類、筆記具、彩色用具等を準備した。

当日は13名の参加があり、(子ども5名、大人8名)で遠くは上越市から参加をいただいた。



写真1 制作の様子

(1) 準備した画材類

色画用紙(白、黒、茶、赤、アイボリーなど)

鉛筆、サインペン、筆ペン

色鉛筆(水溶性)、不透明水彩、色ペン、クレヨン

講師作による参考作品2点

「《鰯》 白画用紙 筆ペンで描画、水彩着色」

「《ししゃも》 黒画用紙 クレヨンで描画彩色」

(2) 当日の流れ

①作品例の紹介 10分

②描画材の特色などの説明と実演 20分

- ・簡単な写生の方法について

写実的な描法

デフォルメを取り入れた抽象的な描法

- ・描画材によって生じる線の特徴について
- ・色塗りと重色について

③制作 40分

④鑑賞会 10分

日常的に絵画を制作していたり、子どもの頃学校での図工美術が好きで得意だった人が多く、比較的スムーズに制作に取りかかった。好評だったのは黒い紙に白で描き、影は塗らないで黒く残す描き方が新鮮だったようで、時間の余った人や作業の早い人は2作目は黒地に描く方法を試している人が多かった。

また、写実的に描こうとする人が多い中で、形の面白さを発見し、魚の特長を生かした描き方をする参加者もいた。制作中の他の参加者もその制作の様子を見て、「自分も次は、やってみよう」と刺激を受けていたようである。(写真2参照)

<作品例>



写真2 黒い紙に明るい色のクレヨンでデフォルメしながら



写真3 同じ秋刀魚を異なる画材で

4 成果と課題

参加者の感想評価は以下の通りである。

<4段階評価より>

○今回のワークショップの感想はどうでしたか？

- ・大変良かった……………8名
- ・まあまあ良かった……………5名
- ・どちらともいえない……………0名
- ・それほどでもなかった……………0名
- ・つまらなかった……………0名

<感想欄より>

- ・企画展のタイトルにふさわしいイベントでした。
- ・高橋由一の作品をより深く鑑賞できそう。
- ・初めてさかなを見て描いた。
- ・黒い紙に描くことがおもしろかった。
- ・画材が多く用意されていて良かったが、多すぎてどれを使ったらいいのか迷った。

様々な年代の人が多く、いろいろな要望に耐えられるように画材の種類を数多く準備したことは結果的には良かったと思う。

とかく「写実的に描きたい」と思う人が多いが、形を解体して整理し、再構成して絵にするデフォルメの手法は絵の面白さを再認識するには効果的だったようである。鑑賞会でも多くの参加者からデフォルメされた作品については好評を博していた。また、一つの作品完成

後も、別の画材や技法を使って同じモチーフを描き比べることは、今までにない新鮮な経験だったようである。このように、いろいろな描き方を体験し、その良さに気づいたことが、本ワークショップの一番の成果である。

課題としては、まず参加者のモチーフの選び方があげられる。

20代の女性が片口鱈の干物（煮干し）を持参したが、描き始めるまでかなりの時間を要していた。対象が小さすぎる上に、乾燥して変形し、二つに折れたりして描写が非常に難しくなったが、結果的には色や形を単純化することによって抽象的な面白い作品になった。（写真4）



写真4 片口鱈の干物

経験豊かな人には、むしろおもしろいモチーフになりうるが、参加者の描写の技量や意欲に合わせた選択が出来るように、モチーフの準備については細やかな事前連絡や当方での準備が出来ると良いと思われる。

また、完成後の鑑賞会はお互いの作品を鑑賞して終了した。解散後、参加者から「もう一度《鮭図》をみたいね」という声が上がった。この声のように、今一度、《鮭図》を前にして、お互いの感想を述べる機会がもてれば、さらに作家の思いに迫ることが出来、充実した美術館での活動になったと思われる。

5 おわりに

今回のワークショップを通じて、企画展示室に飾られている作品の作者の思いや時代背景を考えながら、製作活動を行うことは大変意義深く、充実した活動であることが確認できた。鑑賞と制作はより刺激し合いお互いをより高い次元のものにできる。

この経験を生かし、短時間で多様な人のニーズに応える教育普及の一翼として、次年度も鑑賞と制作の連動したワークショップを計画・実行していきたいと思う。

（新潟県立近代美術館 主任学芸員）